





以上主なものを列挙したが、とにかく江戸時代のこの天災の多いのには驚くほかはない。前記中、宝永四年(二七〇七)の地震について「蘭窓茶話」と「高松藩記」「翁嫗夜話」中から少々現代化して記す。

五剣山の一峰崩落(「蘭窓茶話」より)

宝永四年丁亥七月十日に星月を貫ぬく。八月十二日雨甚だしく、十九日大風、九月十二日に大風雨、海浜の堤くずれ、民家破損多く、この年大いに飢饉なり。十月三日夜天晴れて月見え、四日は甚だ暖にして単衣を着る。笠を着て綿をとり苗をかる。八つ時分(午後二時)に地震してその声雷の如く、地裂けて水湧き出る。砂地は裂ける事わけて甚だし。五剣山の一峰崩れて落ちたり。火光雷の如く、其の響遠方まで聞えたり。墓石は悉く倒れ、井戸側、水甕、壺等飛び出る。家は倒れ、或はゆがみたる如し。北浜の屋倒れ死者二十八人。この時御吟味ありて潰れ家、ゆがみ家、それぞれ米をくだされける。翌日より少しづつ震ること度々なり。海潮多く満ちて平生より五六尺も高し。よつて堤防も多くそこねける。その節誰いとうとなく近日中大いに揺れて高潮来るとて、人々おそれて外にかり屋を作り、米を携え、海潮来たらば山へ逃ぐべしと用意しける。この時、五畿内も同前にて三河、遠江などまで甚だしかりし。大阪も高潮にて人家を損し人も多く死す。京はさほどに無かりし。十一月二十三日至りて富士山焚出、沙石降下、江戸なども昼暗くして咫尺も見えず。二十八日に至りてようよう、空晴れけるとなり。翌子年(宝永五年)夏雹降りて、それより小震も止みけるとなり。富士山の沙石も取り払いに国々より一万石に金二〇〇両ずつ公儀へ御指出なりたり。

宝永四年十月四日未刻(昼ごろ)に地震が起り、「地大イニ震ウ、声有リテ雷ノ如シ、地裂ケ水湧ク、(中略)五剣山一峯崩レ墜チテ、火光電ノ如シ、(中略)蔵舎壊レ墻壁崩ル、管構堅固タリト雖ドモ、屋傾カザルハ無シ、独リ東浜魚肆屋成崩壊ス、圧死スル者甚ダ衆シ」(翁嫗夜話)

宝永四年丁亥十月四日八つ時分高松大地震に付公儀へ御差出之書付(「高松藩記」より)

- 一、天守櫓屋根瓦落ち壁損し申し候
- 一、多門二か所転び懸り申し候、其の他の多門少々ひっこみ屋根瓦落ち壁大破仕り候

一、城内石垣并びに掛ヶ堀所々崩れ申し候

一、城内潰れ家一九軒、其の外二・三之丸掛堀大破仕り候

一、城内橋一か所崩れ申し候

一、潰家九二九軒、内四五軒家中、六四九軒町、二三五軒郷中

一、土蔵一八か所、川口番所三か所、崩れ申し候

一、死者二九人、内九人男、二〇人女

一、怪我人三人、内二人男、一人女

以上